

APU-CLUB 国内学生父母の会 2022年度 定例懇談会

アジア太平洋学部(APS)副学部長 清家久美

自己紹介

- 専門：社会学／理論社会学

※現日本社会学史学会理事 元社会学理論学会理事

- 研究テーマ：「新実在論の社会学への影響について」

- 講義担当：社会学、文化人類学 等

- 特徴：厳しい、頑張れば確実に伸びる

「文化・社会学入門」(100番台)

※14回の講義毎回提出課題

M.ウェーバー、レヴィ=ストロースの原典を読んでまとめる課題

APUか東大か

: 日本や社会を牽引する可能性をもつ大学

- 日本の最先端を走るAPU
- 日本の限界の突破口
- 日本の閉塞感
- 日本の偏差値教育
- 日本の創造性のなさ
- 日本の同質性

(社会科学の大学の理想像)

APSの構造

- 社会科学を基本とする広い学修分野から構成
- 4つの学修分野のいずれかを必修
- 専門性はゼミによって保証
- ゼミの領域：資料
- 換言すれば人文社会系ならばなんでも勉強できる
- 特徴としては、入学前から決定していない分野、すなわち自分で決めなければならぬという大学としては最も重要な特徴

APS
学修分野

国際関係

アジア太平洋地域の未来のために、戦略マインドとリーダーシップを身につける

紛争解決・平和構築について考察を深め、国際問題の解決に取り組んでいける力を養います。国際法、政治学、経済学などを幅広く理解し、政策志向型の学びを通して批判的思考を身につけます。

環境・開発

持続可能な社会をめざして、国際開発協力のあるべき方向性を探究する

アジア太平洋地域の将来を考えるには、環境資源への理解が不可欠です。経済優先の開発が環境問題などを引き起こしている今、経済発展と環境保全の両面から持続可能な開発について考えます。

文化・社会・メディア

社会を多角的にとらえる目を養い、アジア太平洋地域の諸問題への理解を深める

アジア太平洋地域の文化・社会・メディアを学び、この地域が抱える諸問題を考えます。多文化社会の理解を通じて世界を広く捉える視点と、地域をさまざまな角度から複眼的に見る目を養います。

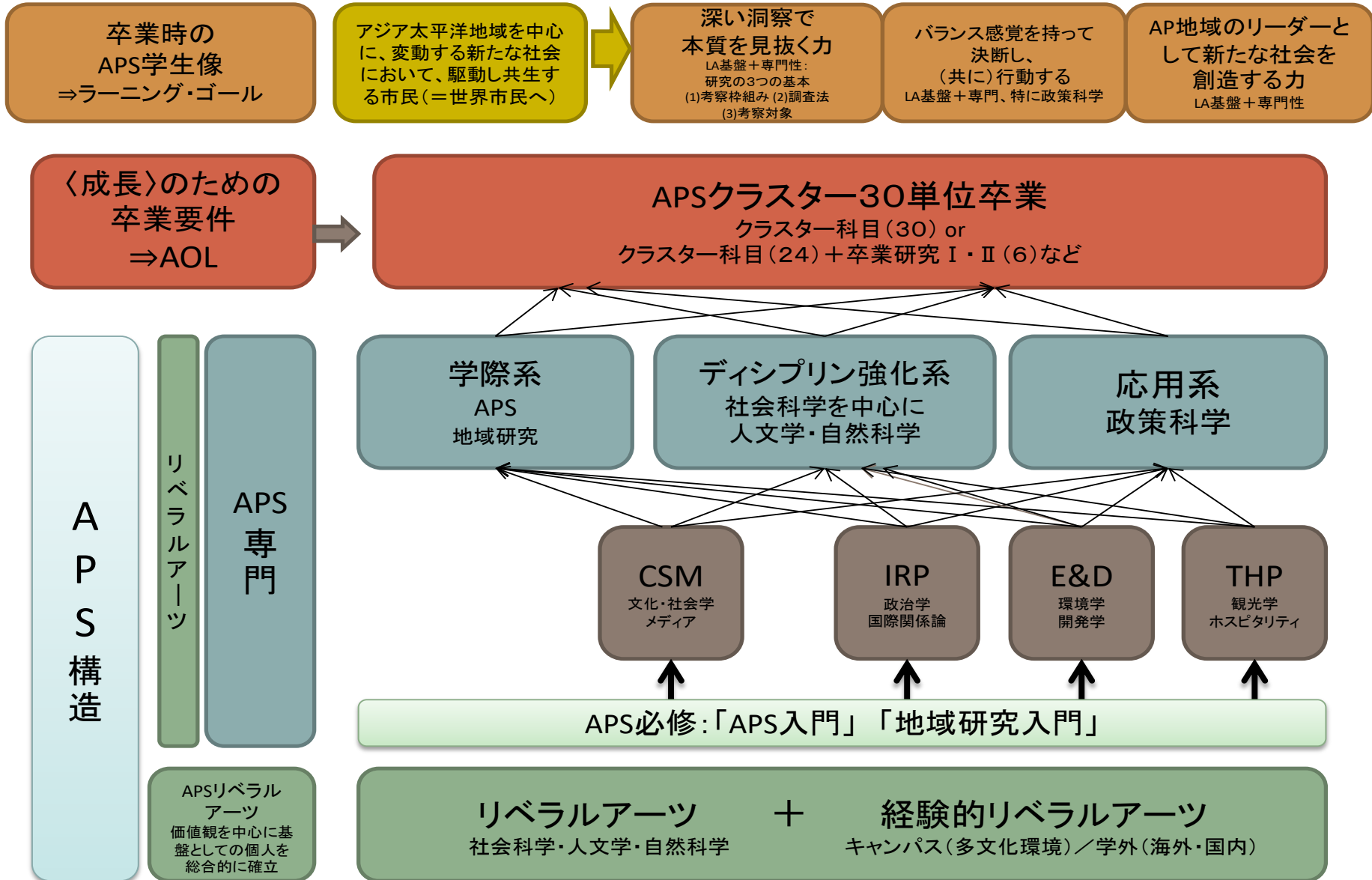
観光学

国際基準の「もてなしの心」を学び、観光産業を通じた地域発展について考える

ツーリズム（観光）を通じた文化交流、地域・産業振興は、アジア太平洋地域の発展にとって重要なテーマ。文化、社会、地域といった視点と、ホスピタリティ（もてなし）を学びます。



APS学部構造：4年間で〈成長する〉学びの質保証と高度化に向けて



アジア太平洋学

- 学問は基本的に西欧出自の学
- アジアからの発信の学の模索

APSの特殊性①

- 4年間という大学期間
- 大学を卒業する時のイメージから
- APUという場で何が起きているのか
 - ① APUで何が多様性を多様性のままに：大小の渦の創出
 - ② 「国際的」環境における予示的空間／場

APSの特殊性②

- APUにおける4年間：
- 1回生：①知的感動 ②勉強／研究の身体化
③圧倒的先輩／先生の姿：The 大学を知る
- 2回生：①多様性の中での選択
(いろいろやってみる)
②学問的姿勢の身体化
③一点突破のための選択に向けて

APSの特殊性③

- 3回生：①多様性の中での選択
②一点突破の決定
③就活／院試にむけて
- 4回生：一点突破に全力を傾けて
- APUという大学の特殊性：やる気
- スペシャリスト型：一点突破的考え方・一芸に秀でて卒業しよう！ = これをやったという自信と確信

卒論タイトル

- 「電子メディアが媒介する社会空間に関する考察—CMCコミュニケーションの多様化と社会空間性・ネットコミュニティを中心に」
- 「都市／地域の視点からの環境問題—水俣における〈まちづくり〉」
- 「マレーシア多文化社会における先住民問題」
- 「樺太アイヌに関する歴史的研究」
- 「庄内神楽の研究」
- 「イスラエルにおける〈キブツ〉の研究」
- 「イギリスの生活におけるサッカー文化」
- 「水俣のまちづくりに関する研究」
- 「日本のグリーンツーリズムの現状と可能性についての考察—安心院の事例研究」
- 「NPO活動の実態における可能性と限界に検する—考察」
- 「〈建築をめぐる運動〉に関する理論的研究論—〈モダン〉以降の建築論の展開に関する批判的考察」
- 「終末期がん医療における患者のQLOに関する考察—ホスピスと代替医療の動きから」
- 「日本における児童擁護施設の現状と問題点の研究」
- 「中国の経済発展と環境問題のかかわり」
- 「博物館における展示物の変遷」
- 「企業における社会活動とブランドによるイメージ戦略」
- 「日本におけるポピュラー音楽の変遷」
- 「生命倫理に関する研究」
- 「インドネシアにおける環境NGO運動」
- 「都市空間における建築様式」
- 「ドイツ・ポーランドの国際教科書対話とドイツ歴史教育へのインパクト」
- 「企業物流の観点による国際物流研究」
- 「企業組織における評価制度とその運用」

- 「ジェンダーの視点から見る日本社会における社会問題についての考察」
- 「少数言語の抱える問題－沖縄・うちな－ぐちについて－」
- 「太陽の家を通して見た日本における障害者問題～障害者と健常者の共生～」
- 「流言の発生メカニズムに関する研究」
- 「うわさと表象の相関関係についての研究」
- 「西田幾多郎－善の研究」
- 「漫才における笑いの変容について」
- 「ナショナリズム研究－共同体論の視点から」
- 「まちづくりに関する研究－宮崎町の事例を中心に」
- 「大学生の鬱に関する研究」(心理学)
- 「諫早干拓についての研究」
- 「ゴスロリに関する研究」
- 「沖縄の民俗的調査」
- 「別府における温泉コミュニティの研究」
- 「報道史に関する研究」
- 「韓国映画研究」
- 「教育NPOに関する研究」
- 「ギアツの解釈人類学的研究」

- 「ルーマン研究」
- 「社会運動論研究:トゥーレーヌを中心に」
- 「生命倫理学的研究」
- 「地域福祉についての研究」
- 「初等教育におけるオルタナティブ教育の可能性についての研究」
- 「若者論ーメディア研究を中心に」
- 「腐女子研究」
- 「カント研究」
- 「ハイエク研究」
- 「過疎地域における新たな福祉のあり方に関する研究」
- 「日本におけるナショナリズム研究」
- 「日本におけるキリスト教の受容についての研究」
- 「清沢満之についての研究」
- 「ネットいじめの研究」
- 「ひきこもりについての研究」
- 「教育と労働についての研究」
- 「小鹿田焼き職人の人類学的研究」
- 「マレーシアのブミプトラ政策についての研究」

APSの特殊性④

選択肢の多さ・多様のオプション

- 選択の多さ、オプションだらけ
- 縦横無尽に勉強、活動するAPU生

- しかし軸が必要
- あらゆる経験と学び、同時に軸をもつこと
- その軸としての専門性とゼミ！

APSの特殊性④

4年間で変化／成長する

- 学生たちは自分の好きなことを徹底してできる：人の目
- 一生懸命頑張って恥ずかしくない大学
- 4年間で圧倒的に変化する学生
- ゼミから、京大、東大、一橋の大学院に進学し、他の修士学生よりも卒業論文が優秀。
- 4年間で起爆剤となって卒業後に一生かけて、小さく大きく爆発。この4年間は一生をつくりあげる基盤。

APS 学生・教員の活躍

APSの国際性

APUと立命館大学国際関係学部が合同で国際人道法模擬裁判を競う

2022年1月8日・9日の二日間、アジア太平洋学部の平野実晴助教のゼミと立命館大学 国際関係学部の越智萌准教授のゼミが、合同で国際人道法模擬裁判大会を開催しました。立命館大学より7名、APUより20名の学生が参加し、国・地域、大学、学年を超えた学び合いの場となりました。

国際刑事裁判所を舞台とした今回の模擬裁判では、架空のケースについて、学生が弁護と検察のチームに分かれ、国際刑事法や国際人道法の知識を駆使しながら、英語で舌戦を繰り広げます。今回の合同ゼミは、学び合いや交流を目的として、また

平野ゼミからは、3回生が合同ゼミで模擬裁判に挑みました。また、4回生は、[2021年度国際人道法（IHL）模擬裁判およびロールプレイ大会](#)へ出場し、模擬裁判の部では準決勝へ進出、ロールプレイの部では優勝に輝いています。

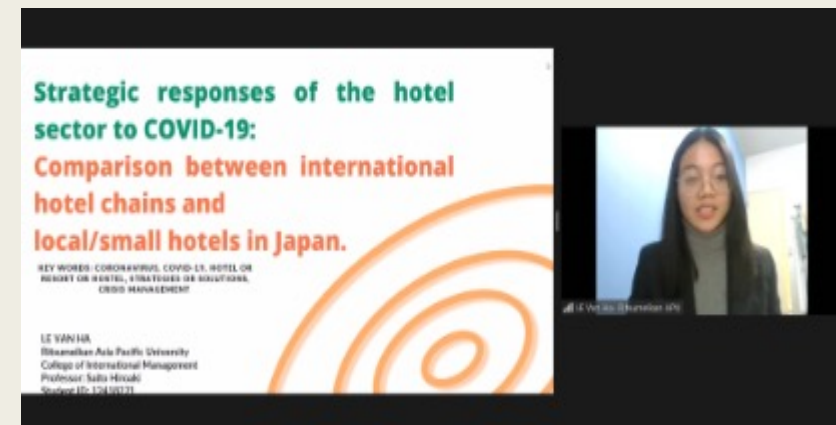


APS 学生・教員の活躍

APSの国際性

観光産業についてのシンポジウムでAPU生9名が受賞

1月22日（土）観光産業について研究する学生同士の学術交流を目的に、2018年よりAPUと和歌山大学が共同で開催しているシンポジウム” Academic Year 2021 Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research” が、昨年引き続き実施され、APUの学生9名が4つの賞を受賞しました。神奈川大学からオーガナイザー、北星学園大学からオブザーバーを迎え、全9大学から合計100名以上の教員、大学院生、学部生が参加し、APUを含む7大学（和歌山大学、関西外国語大学、山口大学、琉球大学、玉川大学、一橋大学）の学生による41件の研究発表が行われました。シンポジウムの共同代表には齊藤広晃 国際経営学部准教授、組織委員会にはJONES Thomas Eアジア太平洋学部教授とBUI Thanh Huong アジア太平洋学部教授が携わりました。



APS 学生・教員の活躍

APU・九州大学、デジタル変革時代の問題解決型学習の共同授業を実施

2021年秋セメスターより、APUと九州大学共創学部の高学生に向けた二大学合同特別講義として、アジア太平洋学部の特殊講義「Sustainable Management of Social-ecological Systems (社会生態学的システムの持続可能なマネジメント)」が開講されました。11月には、**国連気候変動枠組条約第26回締約国会議 (COP26) の最終週**というタイミングで、APUの **Oscar A. Gomez准教授 (アジア太平洋学部)** による**気候変動適応策**をテーマにした講義が行われました。

九州大学共創学部とAPUは、様々なバックグラウンドを持つ両大学の学生が協働して問題解決型プロジェクトに取り組めるよう、この講義を共同で企画しました。アジア太平洋学部の4人の教員、Giguruwa Nishantha教授、Thanh Huong Bui教授、上述Gomez准教授、Alexandru Dimache 助教が、九州大学の先生方と共に、社会と環境の問題を幅広く扱った4つのモジュールから成る講義カリキュラムを開発しました。



APS 学生・教員の活躍

APSの国際性（佐藤洋一郎APS学部長）



OVB-PFHA-OZE **KALINGA INSTITUTE OF INDO-PACIFIC STUDIES** **28th May, 2022**
invites all to an international webinar **5 PM IST**
on
QUAD Summit in Tokyo: Assessment of the Outcome

Speaker	Speaker	Speaker	Speaker	Moderator
 Dr. Ernest Gunasekara-Rockwell, Editor-in-Chief, Journal of Indo-Pacific Affairs	 Prof. Yoichiro Sato, Dean of International Cooperation and Research and the Director of the Democracy Promotion Center.	 Prof. Jonathan Ping, Associate Dean, Bond University, Australia	 Prof. Chintamani Mahapatra, Founder and Hon. Chairperson, KIIPS	 Dr. Monish Tourangbam, Honorary Director, KIIPS

Kalinga Institute of Indo-Pacific Studies

BBCニュースでのインタビュー



APS 国際認証



TedQual

本学アジア太平洋学部が、国連世界観光機関（UNWTO）*1の関連組織であるUNWTO Academyが実施する観光教育機関向けの認証制度「UNWTO. TedQual（Tourism Education Quality）」の再認証を取得しました。2018年3月に初めて取得した本認証の期間満了に伴い再度評価プロセスを受審し、今回これまでの取り組みが高く評価され認証の最長期間である4年（2021年4月～2025年4月）を付与されました。

このTedQualは、観光学教育、研究プログラムの質の向上を目的とし、海外においては、観光学プログラムをもつ著名な大学やそれに準ずる教育機関*2が認証を受けています。

アジア太平洋学部の4つの学修分野のひとつである観光学分野では、国際観光都市別府に立地するという地の利を生かしつつ、海外及び地域との協働学修に力を入れてきました。TedQual国際認証では、UNWTOが定める世界観光倫理憲章（The Global Code of Ethics for Tourism）が柱となっており、その精神（観光を促進する、あるいは観光を通じた世界平和、非差別平等、多文化共生、移動の自由、就労の自由など）に反しない教育・研究が行われていることが重要な要素となっています。本憲章の方向性は、本学並びにアジア太平洋学部の教学目標とも一致するものであります。UNWTOではTedQual認証機関を対象として、様々な学術プログラムや交流プログラムを提供しています。このネットワークの中に入ることで、アジア太平洋学部の観光学クラスターが国際的な教育・研究連携をしていく上でさらなるネットワーク構築（大学間・専攻間の交流や、協定締結など）の実現が可能となります。

*1 国連世界観光機関（UNWTO）について

UNWTOは、1975年1月に観光に関する国際機関として設立され、2003年に国連の専門機関に移行した観光に関する世界最大の国際機関です。観光の地位・競争力の向上、持続可能な観光の推進、観光を通じた貧困削減や開発の推進等を支援しています。



APSの外部評価

- IRの資料

2023年度からの新APS

- 現行のAPSと構造は同じ
違うのは、
- 社会科学として特化した点
- ゼミが必修となった

つまり現行でもゼミを取るように伝えて欲しい

2023からのAPS

2023年度以降、APSの学修分野に新たな「グローバル経済」が加わり、既存の「国際関係」、「文化・社会・メディア」とともに3つの学修分野を構成します。グローバル経済ではグローバル化したアジア太平洋地域を経済学から解明することを目的とし、グローバル共生と未来志向の観点を持ち、全ての地域・世代の人々が幸せになれる世界を目指します。

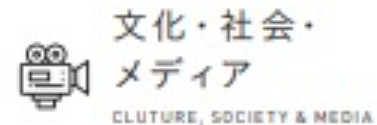
グローバル経済を加えた新たなAPSでは「経済学」「政治学」「社会学」の社会科学のアプローチを用いて、アジア太平洋地域を起点に世界の平和と相互理解について学びを深めます。社会科学の知識を基盤とし、「ジャーナリズム」、「ジェンダー」、「安全保障」や「格差社会」といった学生自身の興味・関心に基づき学びの個別最適化を実現し、独自の研究を可能としています。

新領域への挑戦がはじまる「グローバル経済」。



法律、政治、経済など多様な視点から、国際的な課題を解決する方法について探る。

世界には現在国際連合加盟国が193あります。国内の社会や政治が安定し、経済成長を遂げる国がある一方で、内戦や近隣国との戦争、社会不安や貧困に苦しむ国もあります。世界最大の経済圏となるインド太平洋地域でも、自由貿易や対外投資による経済的な結びつきが拡大する一方で、近隣国同士の領土・国境紛争や、軍事力拡大競争、民主政治の停滞や後退、人権の蹂躞や民族間の争い、環境破壊やテロリズムなどの国境を越えた課題をも抱えています。国際関係分野では、これら課題を分析し解決策を探ります。



文化、社会、メディアからアジア太平洋地域を多角的にとらえる。

人にとって「他者」とは、生きる上での喜びと感動、同時に不幸と制約の源泉であると考えられます。私達はそうした他者と共存する社会に生きています。近代に成立した国民国家は、合理的な共生のしくみを可能にしましたが、現代は、資本主義やメディア技術の高度化によるグローバル化によって、多様性の中での新たな共生のあり方が模索されています。「文化・社会・メディア」ではどのような共生社会が実現可能かという問題をミクロ、マクロの視点から考えます。理論や概念を学び、社会や文化の実態調査をした上で社会問題の解決や新たな提案に挑戦します。



グローバル化したアジア太平洋地域を経済学から解明する。

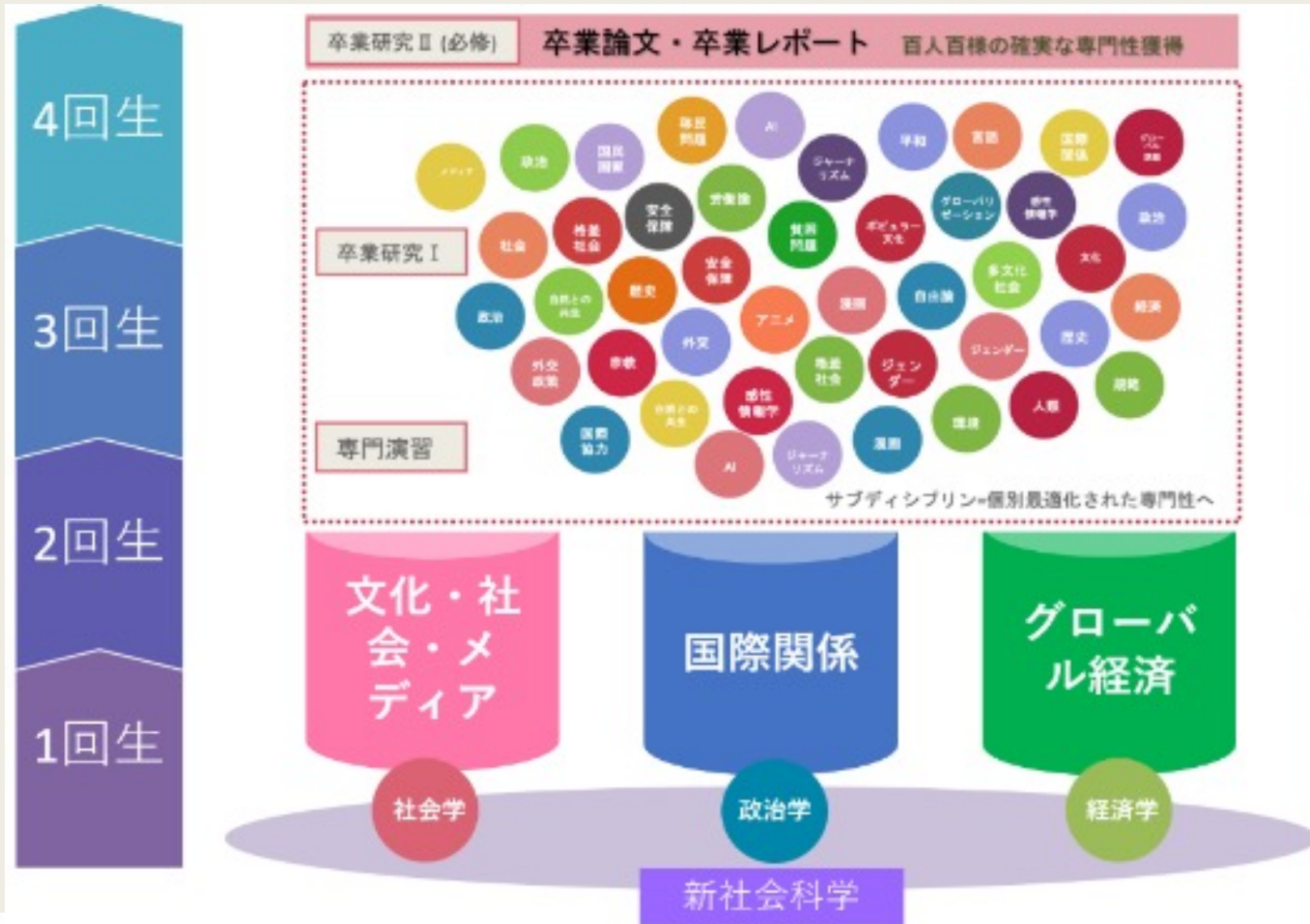
私たちが普段生活するために使っているものはどこから来ているのか。衣服や食品、本など、素材を作り、加工し、製品化されるまで、多くのものが海外を通じて私たちの手元に届いています。他国の異常気象や情勢の変化によって国内での供給不足や価格の高騰など、日本経済にも大きく影響しています。そんなグローバル社会で全ての地域・世代の人々が幸せになるためにはどうしたら良いのか。この分野ではグローバル化したアジア太平洋地域を経済学の視点から解明していきます。

2023からのAPS

APSは、「国際関係（IR）」「文化・社会・メディア（CSM）」「グローバル経済（GE）」の3つの学修分野における学びを最大限に高めるため、「集中」「拡散」「回遊」「実践」の4つの学びのかたちを設けます。



4年間の学びのイメージ



4年間の学びの集大成

専門演習・卒業研究

4年間の学びの集大成としてゼミを必須化。学生はサブディシプリンを横断し、自分のテーマにあったゼミを選ぶ。

サブディシプリンの新しい接合、結びつきは、学生たちの学びの個別最適化を実現し、それぞれ独自の研究を可能にする。



3つの軸となる社会科学の学問分野を入門科目として必修化し、基礎をしっかりと学ぶ。

教員が楽しい理由

- 学生が開放されている、伸び伸びしている
- 好きなことをしている姿
- 学生の成長率が高い
- 「化ける」

さいごに

- 本当におもしろいと思えることを学問を通じて発見したら、とことん応援して欲しい。
- そのおもしろさを見つけることが4年間で最も重要なこと
- それがその学生の個性そのものであり、その後の彼ら自身のコアや軸の土台となる
- 学生は大学で勉強しなければ損
- なぜなら学問は想定以上の力を持つ
- 大学での学びを出発点に一生学び続けること、そのための駆動力をつける
- 卒業してから始まる、卒業後に一生かけて様々な時期に小さな花火、大きな花火を打ち上げる、その起爆剤としての4年間
- 人間は勉強することが好きだということ